（『国語学』178集　1994・9・30）

音韻史の展開——音節構造の変遷——

日本語の音節量について

窪薗晴夫

要旨

近年音韻論研究で注目されている「音節量」の観点から日本語の音節構造を考察し、日本語が通時的にも共時的にも2モーラからなる重音節へ向かう顕著な傾向を示していることを指摘する。また、この傾向がゲルマン系諸言語やラテン語等にも観察される一般性の高い現象であること、これらの観察から日本語の記述にも「モーラ」だけでなく「シラブル」という音韻単位が必要であることをあわせて主張する。

キーワード：音節構造、音節量、音便、モーラ

一、モーラと音節

（1）の語が四つの音声単位からなるという記述は日本語の分析としてはきわめて一般的なものである。この単位が、「モーラ」、「拍」ないしは「音節」と呼ばれるものである。

（1）　a．蜂、アメリカ
　　b．外国、札幌
　　c．東京、観光

日本語の記述にモーラという単位が不可欠であることは疑う余地はないと思われるが[注1]、一方、（1a）の語を4単位、（1b）を3単位、（1c）を2単位とする分析はそれほど一般的なものではない。この分析は、（1b／c）の語に含まれる「特殊拍」または「モーラ音素」と呼ばれる4要素[注2]——すなわち促音・撥音・長音・二重母音の第二要素——が通常の「子音(C)＋母音(V)」からなる「自立拍」とは音韻的に異なるもので、長さの単位としては自立していても、アクセント規則など他の音韻的側面においては自立性が低いという観察に基づくものであり、特殊拍を直前の自立拍とあわせて1単位と数える分析である。この単位はアメリカの音声学者K. L. Pike(1947)が「音声的音節」(phonetic syllable)と呼んだものに等しく、音声学的基準では一つのまとまりをもつ単位とされる。ところが、日本語の記述にモーラとならんでこの単位も必要と考える音韻論的立場では、この

単位に対ししばしば「音節」という訳語をあてるために、多くの国語学者が「モーラ」と同義に用いる「音節」と混同されることになる。本稿では混乱を避けるために「モーラ」と「シラブル」という2つの用語を用いることにする（たとえば「東京」は4モーラ、2シラブルからなる）。ただし音節量の記述に関しては他に適当な訳語が見あたらないことから、シラブルの持つ重さ・長さの意味で「音節量」という用語を、またその下位範疇として「軽音節」・「重音節」などという用語を用いる。

シラブルという概念は、日本語の分析において、主に「シラビーム方言」と東京方言などの「モーラ方言」の音調・アクセント規則の記述に有意義とされるものである（柴田 一九六二）。たとえばシラビーム方言の一つである鹿児島方言では、語（句）末のシラブルか、その直前のシラブルだけが高いとされる。この音調規則では特殊拍にあたる促音・撥音などの存在は音韻的に全く意味を持たず、CVCやCVVの音連鎖がCVと同じ機能しか果たさない。つまりこの方言の音調規則では、「東京」・「観光」などの語が「選挙」・「過去」などの語と等価である。

（2） a. トウ／キョウ（東京）、セン／キョ（選挙）
　　 b. カン／コウ（観光）、カ／コ（過去）

一方、モーラ方言である東京方言では、アクセント核（↓）の位置は原則としてモーラ構造によって決まるものの、特殊拍がアクセント核を担えないために、特殊拍に付与されたアクセント核は直前の自立拍に移動することになる（少なくとも表層ではピッチ下降が特殊拍の直後ではなく自立拍の直後で起こる）。（3）に外来語アクセント規則の例を、（4）に複合語アクセント規則の例をあげる。

（3） a. デラ・ックス ⇒ デラ・ックス
　　 b. ワシン・トン ⇒ ワシ・ントン
　　 c. デザイ・ナー ⇒ デザ・イナー
　　 d. スーパー・マン ⇒ スーパ・ーマン
（4） a. トーキョー＋ト・ ⇒ トーキョー・ト
　　　 ⇒ トーキョ・ート（東京都）
　　 b. ホッカイ＋ド・ー ⇒ ホッカイ・ドー
　　　 ⇒ ホッカ・イドー（北海道）

（3）・（4）のようなアクセント核移動現象に対する最も簡潔な説明は、特殊拍が直前の自立拍とまとまって一つの音韻単位を構成するとみる分析であり（McCawley 1978、早田 一九九二）[注3]、この単位が音声学で定義される 'syllable' という単位――Pike の 'phonetic syllable'――と一致するわけである。日本語のシラブルは、このアクセントの担い手としての機能のほかに、形態規則や言い間違い現象などの説明に不可欠であり、次節以下で述べる音節量の単位としても重要な役割を果たしている（窪薗 一九九三参照）。

二、音節量

二・一 定義

「モーラ」と「シラブル」の違いを踏まえて、「音節量」（syllable weight, syllable quantity）という概念を簡単に説明する（Árnason 1980）。「音節量」とは、各シラブルがその内部構造により特定の「重さ」を持っているという概念であり、開音節（open syllable）・閉音節（closed syllable）の区分などと同じくシラブル分類の一つの基準である。しかしこの概念は、［母音＋子音］の内部構造を問題にする点

において開・閉音節の区分と基本的に異なっている。たとえば短母音と長母音・二重母音の対立は開・閉音節の区分では問題とならないが、音節量による分類においては、長母音が短母音の二倍の重さを持つという形で関与してくる。また母音の後の子音が短母音と同じ重さを持つものとされ、この定義により、長母音を含む開音節が[短母音+子音]という構造の閉音節と同じ重さに分類される。このような定義から、音節量の区分は二元的な対立ではなく、次のように軽音節・重音節・超重音節という三元的なものとなるのである。

(5) a. 軽音節（1モーラ音節）
／CV／ て（手）、め（目）、い（胃）

b. 重音節（2モーラ音節）
／CVV／ ちょう（蝶、腸）、かい（会、貝）
／CVC／ けん（県、券）、キッ〔テ〕（切手）

c. 超重音節（3モーラ音節）
／CVVC／ ワイン、ライン、〔ゲン〕ダイッ〔コ〕（現代っ子）

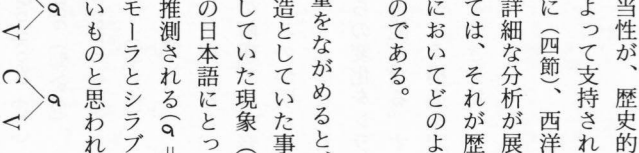
(5)のように定義された重音節・軽音節の概念は、日本語の記述において長音節(long syllable)・短音節(short syllable)と呼ばれてきたものと対応する(McCawley 1978)。長音節とは短音節の2倍の長さ(=重さ)を有するシラブルである。この二種類のシラブルに加え、これまでの日本語研究の一部は3モーラ分の長さを持つ「超重音節」(superheavy syllable, overlong syllable)を認めており、日本語のシラブルは最大限CVVCという構造をとりうると分析している（服部 一九五八、柴田 一九六二）。

従来のシラブル研究では、超重音節をなすとされる3モーラの連続が実際に単一のシラブルを成しているかという基本的な問題がほとんど考察されておらず、実際にこのタイプのシラブルが日本語に存在するかどうか検証されていない。またCV構造からなる1モーラのシラブルが現代日本語でも無標のシラブル構造であるとしばしば主張されながらも、この主張の妥当性が、歴史的音変化過程や現代日本語の共時的音韻過程の分析によって支持されるかどうかも未だ検証されていない。後述するように(四節)、西洋の言語については音節量体系の発達についてかなり詳細な分析が展開されているのに対し、日本語の音節量体系については、それが歴史的にどのように発達してきたか、また現代日本語においてどのような体系を成しているか未だ明らかにされていないのである。

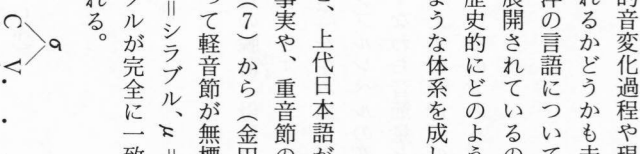
二・二 日本語の音節量

歴史的な観点から日本語の音節量をながめると、上代日本語が(6)のようなCVシラブルを基本構造としていた事実や、重音節の生成につながる連母音の発生を忌避していた現象（7）から（金田一 一九七六、小松 一九八一）、当時の日本語にとって軽音節が無標の音節構造であったのではないかと推測される(σ＝シラブル、μ＝モーラ)。またこの時代の日本語ではモーラとシラブルが完全に一致しており、両者を区別する必要もないものと思われる。

(6)



(7) a. 子音挿入



b．母音融合（母音の単音化）

naga ＋ iki → nageki（長息＝嘆き）

c．母音脱落

ara ＋ iso → ariso（荒磯）

その後の日本語では後述の理由から2モーラからなる重音節がかなり広範囲に発生することになるものの、現代日本語においても軽音節が重音節よりはるかに頻度が高いという事実（8）は変わらない（窪薗 一九九二）。

（8） a．自立拍：特殊拍＝4：1

b．軽音節：重音節＝3：1

この事実は、上代日本語の傾向が現在でも続いていることを示唆しているように見えるが、日本語の歴史的音変化において軽音節が無標の構造として機能してきたことを必ずしも意味するものではない。音節量に直接影響を及ぼす音変化として知られているのは母音や子音の添加（長音化）と脱落（短縮）であり（窪薗 一九八三）、次節以下で見る通り、日本語で起こったこの種の音変化を分析してみると、軽音節から重音節を作り出す性格のものが非常に多いことがわかる。また現代日本語の共時的音韻過程においても、軽音節より重音節の方が無標のシラブル構造として機能しているという知見が得られる。

三、史的音変化と音節量

三・一　音節量過程としての音便

シラブル構造に影響を及ぼした音変化で最大規模のものは平安時代に始まったとされる音便であろう。（9）に4種類の音便とその例をあげる（金田一 一九七六、小松 一九八一）。

（9） a．イ音便：kakita → kaita （書いた）

tukitati → tuitati（月立ち＝一日）

b．ウ音便：arigataku → arigatau（ありがとう）

yokukoso → youkoso（よくこそ）

c．撥音便：yomite → yonde（読んで）

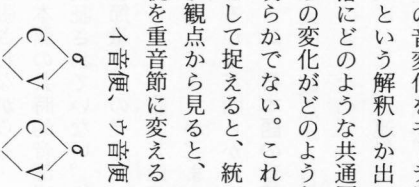
sakarini → sakanni（盛んに）

d．促音便：motite → motte（持って）

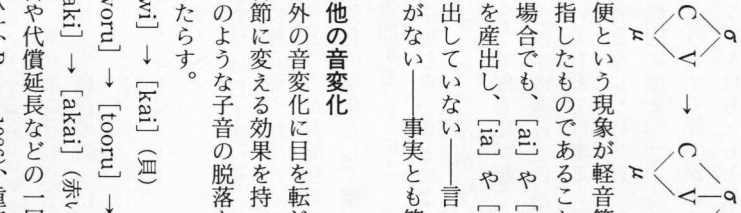
yorite → yotte（寄って）

この音変化をモーラ単位の変化として捉えると、「子音・母音の脱落」という解釈しか出てこない。この解釈では子音の脱落と母音の脱落にどのような共通原理が働いているのか明示化できず[注4]、またそれらの変化がどのような意味で「音便（＝簡便な発音）」を生み出すのか明らかでない。これに対し、これらの変化をシラブルレベルの変化として捉えると、統一的な説明が可能となる。すなわち音節量という観点から見ると、（9）の変化はモーラ構造を変えずに軽音節の連続を重音節に変える（10）のような働きを持っているのである。

（10） イ音便、ウ音便



(11) 撥音便、促音便



このように音便という現象が軽音節から重音節へというシラブル構造の改編を目指したものであることは、子音の脱落によって母音連続を産出する場合でも、[ai] や [ui] のような同一シラブルに属する連母音だけを産出し、[ia] や [io] のような2シラブルにまたがる連母音を産出していない——言い換えるならばア音便やオ音便と呼ばれるものがない——事実とも符合するものである。

三・二　その他の音変化

ここで音便以外の音変化に目を転じてみると、通時的な音声過程に重音節を軽音節に変える効果を持ったものはないことがわかる。たとえば（12）のような子音の脱落も多くの場合に、重音節の生成という結果をもたらす。

(12) a. [kawi] → [kai]（貝）
b. [toworu] → [tooru] → [to:ru]（通る）
c. [akaki] → [akai]（赤い）

また母音融合や代償延長などの一層複雑な音変化過程（13）を見ても（小松 一九八一、Poser 1986）、重音節構造が強化されることはあっても、逆にそれが他の音節量構造に解消されることはないようである。

(13) a. [keΦu] → [keu] → [keo] → [kjo:]（今日）
b. [aΦuji] → [auji] → [aoji] → [o:ji] → [o:ɾji]（扇）
c. [karibito] → [karjudo]（狩人）

日本語の歴史的音変化過程の中で音節量に影響を及ぼすものが、一貫して軽音節を重音節に変える性格を持っているという知見は、上代日本語の音節構造がCVであったという事実を考えると当然の結果とも見える。つまり、日本語に限らず言語一般に、音節量に変化を及ぼす基本的な過程が母音や子音の添加（長音化）と脱落（短縮）であるということを前提に考えると、CVという音節構造の連鎖にこれらの変化のいずれが起こっても、軽音節から重音節が生み出される結果となるのである。しかしながら、この音節量変化がかなり生産的に起こり、現代日本語の約二五%のシラブルが重音節であるという（8）の事実を考えると、日本語の歴史に軽音節から重音節へと向かう力が強く働いていたことは否定できない。また、上代日本語では連母音を避けて軽音節を保持しようとする傾向——上記（7）——が観察されるのに対し、そのような現象がその後の日本語にほとんど観察されず、音便などによって生成された重音節を軽音節に戻そうとする現象が皆無であるということも、この解釈の妥当性を裏付けるものと思われる。

三・三　現代日本語の音節量

日本語の音節量体系が軽音節から重音節へとその無標構造を変えてきたことは、軽音節から重音節を生み出す過程が現代日本語の音韻体系内に広範囲に観察されることからもうかがえる。たとえば（14）のような漢語における高母音脱落現象は、歴史的過程はともかくも、現代日本語の音韻体系においては軽音節の連続を促音化によ

りCVC（重音節）に変える共時的効果を持っている。[注5]

(14) a．学校：gakukoo → gakkoo
b．作曲：sakukyoku → sakkyoku
c．鉄骨：tetukotu → tekkotu

漢語の促音とならんで興味深いのが外来語に見られる促音である。外来語では、短母音の後に促音が添加され（15a）、長母音・二重母音の後（15b）や鼻音の前（15c）では添加されない。

(15) a．cup → カップ
b．carp → カープ
c．can → カン

これまでの研究では日本語は開音節言語であるという前提のもと、暗黙のうちに軽音節を無標の過程と捉え、（15a）を有標な現象とみなしてきた。ところが音節量の変化として捉えると、（15）の変化はすべて重音節化の現象として捉えることができる。すなわち（15a）では促音を添加することにより重音節を生成し、（15b／c）では、逆に促音を添加しないことにより、同じ2モーラシラブルを生成している。（15a）で促音化が起こらなければ軽音節（カプ）が生成され、（15b／c）で促音化が起これば3モーラからなる超重音節（カーップ、カッン）が生成されていたのである。また同様の分析が母音の無声化についてもあてはまる（窪薗 一九九三参照）。

現代日本語の音節量については、軽音節の連続を一つの重音節に変えようとする傾向に加え、三モーラからなるシラブル（＝超重音節）の生起を忌避しようとする傾向があることも指摘しておく必要がある。3モーラシラブルはもともと日本語にはなかったシラブル構造で、また漢語にも存在しなかったものである。ところが英語などから借用された外来語には、そのまま借用されていたならば［長母音（二重母音）＋撥音］という構造の3モーラシラブルを形成するはずのものが少なくない。ところがこれらの多くは（16a）のように母音を短縮するか、あるいは（16b）のように鼻音の後ろに母音を添加することにより、3モーラシラブルの生起を忌避しようとしている。

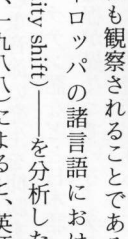
(16) a．change → チェ(イ)ンジ、ground → グラ(ウ)ンド、
icecream → アイスクリ(ー)ン
b．icecream → アイスクリーム、team → チーム

また（15b／c）の現象も（16a）の現象と同じ性格のもので、3モーラシラブルの生成を阻止するために促音添加を阻止したものと解釈できる。

（16）の規則にもかかわらず、現代日本語には「（デ）ザイン」、「（おばあ）さんっ（子）」のように3モーラシラブルと思えるモーラ連続が少なからず観察される。しかしながらそれらのアクセント構造（17）を分析してみると、多くの場合に単一のシラブルを構成するのではなく、（18）のように2シラブルとして再構成されていることがわかる（窪薗 一九九三）。

(17) a．デザ・イン：
デザイン・ハク → デザイ・ンハク（デザイン博）
ラ・イン：
ライン・ガワ → ライ・ンガワ（ライン川）
b．オバーサンッ・コ → オバーサン・ッコ
（おばあさんっ子）
ゲンダイッ・コ → ゲンダイ・ッコ（現代っ子）

(18)



四、音節量変化の普遍性

四・一　他の言語における音節量変化

前節までの議論から、日本語は歴史的にも共時的にも、軽音節の連続から重音節を生み出す傾向を示していることがわかる。その一方で、現代日本語の外来語借用などに見られる音変化過程を考察すると、3モーラからなる超重音節の生起を避けようとしている傾向がうかがえる。これらの傾向は、日本語の音節が音節量体系において中間的構造である重音節へと向かっていることを意味している。一見関係ないように思えるいくつかの現象に統一的な説明ができるということは興味深い知見であるが、この問題がさらに興味深いことは、同じ音節量体系の推移傾向が日本語とは系統の異なる複数の言語にも観察されることである。

ヨーロッパの諸言語における音節量体系の推移――音量推移(quantity shift)――を分析したLass(1974), Árnason(1980), 窪薗(一九八三、一九八八)によると、英語をはじめとするゲルマン諸語やラテン系の言語に、重音節を好む傾向が広範囲に観察される。たとえばラテン語では、古典ラテン語期から俗ラテン語期に至る期間に、閉音節における長母音の短音化と、開音節における短母音の長音化という、分節素の変化としては逆の効果を持つ二つの音変化（19）が起こった。この一連の母音音量変化は、母音の長短を音韻的な対立から音声的なもの（異音差異）に変えると同時に、三元的な対立をしていた古典期の音節量体系を、重音節という中間の音節量に統一する効果を持っていた（ドット/.はシラブル境界を表す）。

(19)

	古典ラテン語	俗ラテン語	
a. 軽音節：	rō.ta	rō.ta	'wheel'
b. 重音節：	sō.lus	sō.lus	'lonely'
	gūt.ta	gūt.ta	'drop, spot'
c. 超重音節：	stēl.la	stēl.la	'star'

ラテン語に起こった音量推移とそれに伴う音節量の統一現象は、ゲルマン諸語にも明確な足跡を残している。たとえば西ゲルマン語派に属する英語では、強勢が置かれる開音節において母音が長音化し、その一方で閉音節の長母音が短音化したことにより、軽音節が重音節へ（20a）、超重音節が重音節へ（20b）とそれぞれ変化していった。[注6]

(20) a. hē → hē 'he'
nā.me → nā.me 'name'
b. kēp.te → kēp.te 'kept' (vs. kē.pan 'keep')
gōn → gōn 'gone' (vs. gō 'go')

四・二　日本語との比較

ラテン語や英語をはじめとする諸言語に日本語と共通した音韻原理が働いていることはたいへん興味深い点であるが、これらの言語と日本語の音節量変化の間に違いがあることも指摘しておかなければならない。まず第一に、音節量変化の出発点が異なっている。ラテン語などの言語では、音節量変化が始まる段階で軽音節・重音節・

超重音節という3つのタイプの音節が存在していた。つまり音節量の対立があった。これに対し日本語の場合には、母音の長さが弁別的でなかったこととも関係して、そのような音節量の対立はなく、軽音節（CV）だけしか存在しなかった。このような違いがあるために、ラテン語などでは中間的な音節量へ統一する形で音節構造の重音節化が進み、日本語では軽音節を重音節に変え、また（外来語において）超重音節の発生を抑制する形で重音節化が進展していった。第二に、ラテン語などと日本語では、軽音節を重音節へと変える具体的な過程が異なっている。ラテン語などでは短母音を長母音化することにより重音節が作られていったが、日本語では母音・子音の脱落や連母音の融合などの変化を通じ二つのシラブルを一つのシラブルに融合するという手段により重音節を生成している。ラテン語などの諸言語と日本語がこのように異なる手段をとったのは、上で述べた音節量変化の出発点における言語体系の違いが関係している。すなわち、ラテン語などでは母音の音量対立があったために、短母音を長母音化することにより音節全体を軽音節から重音節へ変えることができたが、母音の音量対立がなかった日本語ではそのような選択が許されず、二つの軽音節を融合するという手段をとったものと考えられる。

四・三　重音節の謎

日本語の音節構造の変遷をこのように音節量の観点から解釈すると、次の2つの問題が基本的な疑問として残る。まず第一に、なぜ多くの言語において重音節が無標の音節構造として機能するのであろうか。言語の系統を超えてこのような傾向が観察されるとすれば、その共通の要因を人間の生理構造や認知構造などに求める必要が出てくる。第二に、音便などの音節量変化が始まる前の日本語（つまり上代日本語）はなぜ軽音節という有標の音節体系を有していたのか。日本語がラテン語などと同じく重音節を無標の音節構造としており、歴史的に有標構造を無標構造へ変える方向に発展してきたという考え方は、通時的変化の説明としては納得できるものであっても、共時的な観点からみると説得力に欠けるように思われる。これらの2つの問題はいずれも今後詳細に検討すべきものであるが、これまでの研究から次のような手がかりをつかむことができる。

まず最初の問題については、日本語でも英語でも言語獲得期の乳幼児の言語で重音節が多用されるという指摘が興味深い。日本語の場合、親が乳幼児に対して用いる赤ちゃん言葉（motherese）に重音節がきわめて多い[注7]。また英語の場合でも、重音節が軽音節より先に獲得され、また軽音節の母音を長く発音することにより音声的に重音節として産出する傾向が見られるという（Allen & Hawkins 1978）。これらの報告は、軽音節や超重音節に比べ重音節が発音しやすい音節構造であることと、重音節化が音韻的な手段だけでなく音声的な手段でも達成できることを示唆している。

二番目の問題については、上代日本語のCVシラブルが音声的には重音節であった可能性が存在する。まず上代日本語は現代日本語よりアクセント型が多く（小松　一九八一）、また単音節語の割合も現在よりもはるかに高かったことから（阪倉　一九九三）、中国語のような声調言語に近い体系を有していたものと想像される。一般に、ピッチの音韻対立が豊かな言語ではそうでない言語よりも、シラブルの音声的な長さが長く[注8]、また、単音節語の母音の方が多音節語の母

音よりも長いという傾向が観察されるようである（cf．Dauer 1983）。これらの一般的な傾向を日本語の歴史にあてはめて考えると、上代日本語の母音の方が、現代日本語の母音よりも音声的に長かったのではないかという推論が成り立つ。つまり、上代日本語の母音は母音の音量対立がなかったために音韻的には短母音であったと解釈されているが、少なくとも音声的には現代の短母音より長かったと推測できる。とすれば、その母音を含むシラブルは音声的には重音節かそれに近いものであったということになる。この仮説が正しければ、単音節語から多音節語へという語構造の変化とアクセント型の減少というプロソディー構造の変化により、1シラブルが音声的に短くなり軽音節化されていく中で、重音節を保とうとする力によって音便などの音節量変化が起こったのではないかという推論が成り立つ。つまり、シラブルの短縮という音声レベルの変化によって重音節が有標の軽音節に変えられてしまうことに対して、音便などの音韻的な手段によって無標の音節量を保とうとしたのではないかと考えられるのである。この仮説は今の段階では推測の域を出るものではないが、音便という音韻的な意味での音節量変化が始まった時期が、単音節語から多音節語へという急激な語構造変化が起こった時期と一致するということや、上で述べた英語の幼児に見られる音声的な重音節化の現象とあわせて考えると、今後その詳細を検討するに値する仮説であろう。

五、結　語

本稿では、日本語の通時的・共時的音韻過程に、1モーラからなるシラブル（軽音節）の連続を重音節に変えようとする傾向が観察されることを指摘した。現代日本語の音韻体系において、重音節はたしかに軽音節より数の上では劣っているが、通時的にみると「音便」や子音の脱落などの音変化によってその生起頻度は高くなってきており、また現代日本語の共時体系においても、「高母音脱落（＝促音化）」という音声過程や、その予備的過程としての「高母音の無声化」により、軽音節から重音節への移行が生産的な音声過程として進行していることが明確に読み取れる。この一方で、現代日本語には外来語などに見られる3モーラからなる超重音節を忌避しようとする強い傾向が観察される。比較的長い外来語の場合には、母音の脱落という手段や重子音化の忌避という形でこの有標構造を回避しようとし、また短い外来語でも2シラブル化する形でこの特殊なタイプの音節構造を避けようとする。

このように日本語のシラブルが、軽音節や超重音節から重音節へという中間の音節量へ変化してきているという事実は、実は日本語の個別言語的現象ではなく、英語やその他のヨーロッパの諸言語に「音量推移」として報告されてきた傾向と一致するものである。系統の異なる言語間にこのような共通性が見られるという事実は、「重音節」という音節量が普遍的に無標の音節構造であり、また「重音節への収束」という音節量変化が、この無標構造へ向かう普遍的な音韻現象である可能性を示唆している。

このように見てみると、日本語の音韻現象を考える上で、また音韻構造・現象の普遍性を考察する上で、「音節量」という概念がきわめて重要な役割を果たすことがわかる。「音節量」という概念は、「音節（＝シラブル）」という音韻単位の存在を前提としたものであるから、この「音節量」にもとづく一般化は、「シラブル」という音韻単

位の重要性を示していることになり、日本語の記述にも「モーラ」と並んで「シラブル」が重要な役割を果たしているという知見が得られる。逆の見方をすると、「シラブル」という韻律単位をもとに「音節量」という概念を音韻記述に導入することにより、一見無関係に思われる日本語の現象に統一的な説明が可能となり、さらには日本語と他の言語に共通する音韻現象もきわめて一般的な形で捉えることができるようになるのである。

謝辞

本稿は国語学会（平成五年度秋季大会）のテーマ別発表会「音韻史の展開」で口頭発表した論文がもとになっている。加筆・修正にあたっては同発表会でいただいたコメントが有益であった。本研究は平成5年度文部省科研費・総合研究（A）（05301104）と奨励研究（A）（05710290）の補助を受けてなされたものである。

注1　詳しくはKubozono（一九八九）、窪薗（一九九二）を参照。

注2　特殊拍（モーラ音素）の中では二重母音の第二要素（J）がもっとも自立性が高いことから、この要素を自立拍として扱う研究者も多い。

注3　この分析に対する批判として上野（一九九三）参照。

注4　音便をモーラレベルの現象としてみる立場では小松（一九八一）の分析が興味深い。

注5　ただし（14）の漢語における促音とCVの交替について、前者を基底形、後者を派生形と捉える見方もある（Itô & Mester 1993）。

注6　詳細については窪薗（一九八三、一九八八）を参照。

注7　たとえばワンワン、ポンポン、ハイハイ、マンマ、オッキ、シッコなど。詳しくは窪薗（一九九三）参照。

注8　たとえばピッチによる音韻対立が豊富な現代中国語では、通常の発話速度における1シラブルの長さが平均450 msecであり（望月一九八三）、現代日本語のCVシラブルの約三倍の長さを持っている。

参考文献

Allen, G. D. & S. Hawkins (1978) The development of phonological rhythm. In A. Bell & J. B. Hooper (eds.) *Syllables and Segments*. 173-185. Amsterdam: North-Holland.

Árnason, K. (1980) *Quantity in Historical Linguistics*. Cambridge University Press.

Dauer, R. M. (1983) Stress-timing and syllable-timing reanalyzed. *Journal of Phonetics* 11. 51-62.

服部四郎（一九五八）「日本語 音韻」『世界大百科事典』平凡社。

早田輝洋（一九九二）「東京方言におけるアクセントの担い手と複合の熟合度」、『日本語イントネーションの実態と分析』（文部省科研費・重点領域研究「日本語音声」C3班研究成果報告書）259-264.

Itô, J. & A. Mester (1993) Syllable optimization and alignment. 一九九三年国際獨協フォーラムでの口頭発表。

金田一京助（一九七六）『日本語の変遷』講談社学術文庫。

小松英雄（一九八一）『日本語の音韻』（日本語の世界7）中央公論社。

窪薗晴夫（一九八三）On the History of 'Isochronie' in English. 『英文学研究』Vol. LX, No. 1, 133-147.

窪薗晴夫（一九八八）「等時化の条件とそのメカニズム：音量対立の史的研究」*IVY XXI* 231-247.

Kubozono, H. (1989) The mora and syllable structure in Japanese: evidence from speech errors. *Language and Speech* 32(3), 249-278.

窪薗晴夫（一九九二）「日本語のモーラ：その役割と特性」『日本語のモ

ーラと音節構造に関する総合的研究（1）』（文部省科研費重点領域研究「日本語音声」E10班研究成果報告書）、48-61.
窪薗晴夫（一九九三）「日本語の音節量」、『日本語のモーラと音節構造に関する総合的研究（2）』（文部省科研費・重点領域研究「日本語音声」E10班研究成果報告書）。72-101.
Lass, R. (1974) Linguistic orthogenesis? Scots vowel quantity and the English length conspiracy. In J. Anderson and C. Jones (eds.) *Historical Linguistics II*. 311-352. North-Holland.
McCawley, J. (1978) What is a tone language? In V. Fromkin (ed.) *Tone: A Linguistic Survey* 113-131. Academic Press.
望月八十吉（一九八三）『中国語研究・学習双書13、中国語と日本語』光生館。
Pike, K. L. (1947) *Phonemics: A Technique for Reducing Languages to Writing*. The University of Michigan Press.
Poser, W. (1986) Japanese evidence bearing on the compensatory lengthening controversy. In L. Wetzels and E. Sezer (eds.) *Studies in Compensatory Lengthening*, 167-186. Foris.
阪倉篤義（一九九三）『日本語表現の流れ』岩波書店。
柴田武（一九六二）「音韻」『方言学概説』武蔵野書院。
上野善道（一九九三）「日本語の音節とアクセント」『国文学解釈と鑑賞』58-1, 14-23.

——大阪外国語大学助教授——